

鐘の声

永井荷風



鐘の聲

永井荷風

住みふるした麻布あさふの家の二階には、どうかすると、鐘の聲の聞えてくることがある。

鐘の聲は遠過ぎもせず、また近すぎもしない。何か物を考えている時でもそのために妨げ乱されるようなことはない。そのまま考に沈みながら、静に聴いていられる音色である。また何事も考えず、つかれてぼんやりしている時には、それがためになお更ぼんやり、夢でも見ているような心持になる。西洋の詩にいう揺籃ゆりかごの歌のような、心持のいい柔な響である。

わたくしは響のわたつて来る方向から推測して芝山内しばさんないの鐘だときめている。

むかし芝の鐘は切通しにあつたそうであるが、今はその処には見えない。今の鐘は増上寺ぞうじやうじの境内の、どの辺から撞き出されるのか。わたくしはこれを知らない。

わたくしは今の家にはもう二十年近く住んでいる。始めて引越して来たころには、近処の崖下には、茅葺屋根かやぶきの家が残っていて、昼中もひるなか 鶏にわとりが鳴いていたほどであったから、鐘の音も今日よりは、もっと度々聞えていたはずである。しかしいくら思返して見ても、その時分鐘の音に耳をすませて、物思いに耽ふけつたような記憶がない。十年前には鐘の音に耳を澄ますほど、老込んでしまわなかつた故

でもあろう。

然るに震災の後、いつからともなく鐘の音は、むかし覚えたことのない響を伝えて来るようになった。昨日聞いた時のように、今日もまた聞きたいものと、それとなく心待ちに待ちかまえるような事さえあるようになって来たのである。

鐘は昼夜を問わず、時の来ることに撞きだされるのは言うまでもない。しかし車の響、風の音、人の声、ラヂオ、飛行機、蓄音器、さまざまの物音に遮られて、滅多にわたくしの耳には達しない。

わたくしの家は崖の上に立っている。裏窓から西北の方に山王と氷川の森が見えるので、冬の中西北の富士おろしが吹きつづくと、崖の竹藪や庭の樹が物すごく騒ぎ立てる。窓の戸のみならず家屋を揺り動かすこともある。季節と共に風の向も変つて、春から夏になると、鄰近処の家となりきんじよの戸や窓があげ放されるので、東南から吹いて来る風につれ、四方に湧起るラヂオの響は、朝早くから夜も初更に至る頃まで、わたくしの家を包囲する。これがために鐘の聲は一時、全く忘れられてしまったようになるが、する中に、また突然何かの拍子にわたくしを驚すのである。

この年月の経験で、鐘の聲が最もわたくしを喜ばすのは、二、三日荒れに荒れた木枯しが、短い冬の日のあわただしく暮れると共に、ぱったり吹きやんで、寒い夜が一層寒く、一層静になつたように思われる時、つけたばかりの燈火の下に、独り夕餉の箸を取上げる途端、コーンとはっ

きり最初の一撞ひとつきが耳みみもと元にきこえてくる時である。驚いて箸を持ったまま、思わず音のする彼方かなたを見返ると、底びかりのする神秘的な夜の空に、宵よいの明星みょうしょうのかけが、たった一ツさびし気に浮ういているのが見える。枯れた樹の梢に三日月のかかっているのを見ることがある。

やがて日の長くなることが、やや際立きわだって知られる暮れがた。昼は既に尽きながら、まだ夜にはなりきらない頃、読むことにも書くことにも倦うみ果うてて、これから燈火あかりのつく夜になっても、何をしようという目当も楽しみもないというような時、ふと耳にする鐘の音は、机に頬杖をつくひじのしびれにさえ心付かぬほど、埒らちもないむかしの思出に人をいざなうことがある。死んだ友達の遺著など、あわてて取出し、夜のふけわたるまで読み耽ひけるのも、こんな時である。

若葉わかばの茂りに庭のみならず、家の窓もまた薄暗く、殊に糠ぬか雨あめの雫しずくが葉末から音もなく滴したたる昼過ぎ。いつもより一層遠く柔に聞えて来る鐘の声は、鈴木春信の古き版画の色と線とから感じられるような、疲労と倦怠を思わせるが、これに反して秋も末近く、一宵ひとよごとこそその力を増すような西風に、ときれて聞える鐘の声は屈原が『楚辞そし』にもたとえたい。

昭和七年の夏よりこの方かた、世のありさまの変るにつれて、鐘の声もまたわたくしには明治の世にはおぼえた事のない響を伝えるようになった。それは忍辱にんじやくと諦悟ていごの道を説く静なささやきである。

西行も、芭蕉も、ピエール・ロチも、ラフカチオ・ハアンも、各おのおのその生涯の或時代において、この響、この声、この囁ささやきに、深く心を澄まし耳を傾けた。しかし歴史はいまだかつて、如何なる人の伝記についても、殷々いんいんたる鐘の音が奮闘勇躍の氣勢を揚げさせたことを説いていない。時勢の変転して行く不可解の力は、天変地妖の力にも優っている。仏教の形式と、仏僧の生活とは既に変じて、芭蕉やハアン等が仏寺の鐘を聴いた時の如くではない。僧が夜半に起きて鐘をつく習慣さえ、いつまで昔のままにつづくものであろう。

たまたま鐘の声を耳にする時、わたくしは何の理由もなく、むかしの人々と同じような心持で、鐘の声を聴く最後の一人ではないかというような心細い気がしてならない……。

昭和十一年三月

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1966（昭和41）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1961（昭和36）年11月〜1962（昭和37）年3月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。